

「ひととかかわりあえる自立をめざして」

～すべての教科・領域に生きてはたらく生活科～

1. 研究テーマ設定の理由

「自立」は「他の援助や支配を受けず、自分の力で判断したり身を立てたりすること。」(広辞苑第6版)とある。そして生活科の教科目標は「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然との関わりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。」である。この『自立への基礎』を養うために、最も必要なものは“ひととかかわりあい”であると考えた。“もの・こととかかわりあい”から、「もっと人とかかわりたい。」と思い、自らかかわりを求め、行動を起こし“かかわりあい”にできる力こそ「自立」といえるのではないだろうか。かかわるだけでは、「自立」にはならない。相手のことを考え、かかわることで相手がそれに応えて初めて“かかわりあい”になる。

“ひととかかわりあい”の中で子どもたちは生き生きとしている。例えば、お茶会をした時「上手だね。ありがとう。」と人に認められ、「これからもやってみたくなりました。」と自信・意欲がわいてきたとき。自らの発見を他者に認められ、「もっと知りたい。」という興味・関心を持ち、学習がさらに深まり、ひろがったとき。子どもたちは様々な活動を通して“もの・こととかかわりあい”，課題に向かいジャンプしたことで自信を持ち，“ひととかかわりたい”という思いをもつのである。その思いに至るまでの“もの・こととかかわりあい”が重要なのである。“もの・こと”とかかわりあいは「自立」の手立てとなる。しかし生活科だけのかかわりでは手立てとして不十分である。そこで、すべての教科と生活科がかかわりあい，“もの・こと”にどっぷりとつかれることが大切なのではと仮定し、研究を進めていこうと考えた。

(1) 学校提案とかかわって

学校提案に、「ある対象について学び始める時にはその経験の少なさから根拠をもつことは難しいと考えられる。しかし、それまでの既有経験・既習内容と関連付け、その段階での理由や根拠をもつことはできる。そして、その理由や根拠をもちながら対話を進めることによって、吟味が生まれるのである。」とある。「吟味を生み出す」ためには多くの既習の体験・経験が必要である。

しかし、学年特に一年生は既有経験・既習内容が多いとはいえない。また生活科のそれだけでは少ない。そこで、すべての教科・領域と生活科がかかわりあえば、吟味を生み出すための、“理由や根拠”となる体験・経験をたくさん得られると考えた。学習指導要領ではおもに「国語科・音楽科・図画工作科」の合科的・関連的な指導を記しているが、本提案ではすべての教科・領域と生活科をかかわりあわせて学習をすすめることで、子どもたちがたくさん“理由や根拠”を得られ、吟味の手立てになると考えた。

(2) 生活科でめざす子ども像

「もっと人とかかわりたい。」と思い、自らかかわりを求め、行動を起こし“かかわりあい”にできる力をもった子である。そのために“もの・こと”をじっくりかかわりあうことができる、またそれを“ひととかかわりあい”に生かすことができるようになってほしい。その中で“ひととかかわりあう”楽しさ・厳しさなど様々なことを低学年で感じ、自信をもって学校生活を送ってほしいと願う。

また、教師は手立てとして意図的にすべての教科・領域と生活科をかかわりあわせて年間学習計画を立て進めていく。しかし、子どもたちにとって、そのかかわりあいが自然と学習場面であらわれ、「生活のお勉強、楽しいよ!」と笑顔あふれ、生き生きとできる時間にしたいたいと考えるのである。

2. 生活科学習における「学びの質の高まり」

他教科・領域で得た理由や根拠を用いて、生活科に「吟味を生み出す対話」が見られたとき、また生活科で得た理由や根拠を用いて他教科・領域でそれができたときに学びの質が高まると考える。

さらに学んだことを実生活の中で生かすことができたときである。“人とのかかわりあい”を教室の外でも進んで求め、行動し、そこで経験・体験したことをまた学校生活の中で生かせる、という繰り返しができることが「学びの質の高まり」であると考え。

3. 研究の展望

研究は主に三つの方法を進めていく。

一つ目は、各教科・領域と生活科をかかわりあわせた年間指導計画を作成し進めることである。「吟味を生み出す」ための子どもたちの体験・経験に基づいた理由や根拠から表現方法や活動内容をひろげるために、すべての教科・領域と生活科をかかわりあわせて進めていきたいと考える。

また、年間指導計画は2か月ごとに子どもたちのめあての達成状況や思いや願いをみとり、見直し・修正を行っていく。合わせて教師のねらいも確実に入れていく。生活科指導年間計画だけでなく、すべての教科・領域の見直し・修正も行っていく。

二つ目は、昨年引き続き「課題は子どもたちから生まれたものであること」とする。生活科は子どもたちの思い・願いから進めていく教科である。課題には子どもたちの思い・願いが含まれていなければならない。子どもたちが対話を進めるために明確な課題設定を行う。そのために子どもたちの思い・願いをみとり、あわせて教師のねらいを取り入れ、進めていきたい。

三つ目は、『附属っ子コミュニケーション“和み”大作戦』を継続して行うことである。

本校は学校区が広く、子どもたち全員が同じ生活経験や地域性を持っていない。そのため、子どもたちが共有できるものとして設定している。共有できる“和み”と子どもたち一人ひとりが持っている生活経験を協同的な学びをひろげ、深めていきたい。

『附属っ子コミュニケーション“和み”大作戦』

「和」の生活様式に根ざした学習活動である。

一昨年度から1・2年生が生活科年間17時間を用いて行ってきた。今年度は3年目となる。内容は昨年度と大きく変わっていないが、子どもたちの実態や思い・願いで多少変化している。

- (1)「日本の季節感」を感じる…お花飾り花、学校探検、野菜作り、季節の行事など
- (2)「日本の生活習慣」を身につける…茶道や生け花体験を通して、心地よい雰囲気を感じるために礼儀、所作を身につける。
- (3)「日本の伝統文化」に触れる…本物の“和”の雰囲気に触れるためゲストティーチャーを招いたり、見学に行ったりする。茶道・和菓子作りなど
- (4)他教科・領域との関連…他教科・領域を生活科に関連させての単元構成し、進めていく。
- (5)保護者の方とのふれあい…“和みたい”を組織し、子どもたちのより充実した体験・活動を支援していただく。

4. 研究の評価について

方法として、子どもたちが自己の課題に向かっている時、小グループで課題に向かう時など様々な場面で子どもたちに多様な表現活動（ノート・絵・ものづくり・劇化など）を行わせ、表現したものを比較し、どのような変容をしているかを探っていく。生活科とかかわりあっている教科・領域のそれらも、研究評価の対象としていく。

また、実生活で見られるであろう「学びの質の高まり」を知るために、保護者の方々にアンケート協力をしていただき、検証していく。

- 引用・参考文献 ○新小学校学習指導要領解説 生活編 文部科学省
○2009 領域提案 和歌山大学教育学部附属小学校 生活科
○教師の言葉とコミュニケーション～教師の言葉から授業の質を高めるために～
秋田喜代美・編 (株)教育開発研究所